

北御門二郎・序説

上村雄一

1、略歴

北御門二郎は、大正2年（1913年）2月16日、俊雄とハマの次男として湯前村で生まれた。三人姉兄の末っ子である。父俊雄は福岡県久留米の出身で、明治27年（1894年）に移住した。小山勝清と同じく北御門家は移住組であり、資産家でもあった。この点でも勝清と類似する。

大正6年に、人吉町で受洗する。同9年（1920年）、湯前村立湯前小学校に入学、同13年（1924年）4月、小学校4年を終了するとともに、熊本市の白川小学校に転校する。田舎の学校では進学に不利であると母が判断したことによる。白川小学校へは祖母スマのもとから通学した。同14年（1925年）4月、熊本県立熊本中

学校に入学、昭和5年（1930年）4月、第五高等学校に進学した。これより先の略歴については、「トルストイとの有縁・覚書」①②で、すでに簡単に触れている。10歳まで湯前で過ごし、東京帝国大学に進む。昭和8年（1933年）の20歳までの10年間に熊本市で過ごしたことになる。北御門は「熊本市を第2の故郷」という。熊本時代の10年間、祖母と暮らしたことの意味は大きく、祖母スマを「私が一生のうちに出会った女性のなかで、おそらく最高に徳の高い女性であり、聡明謙遜で信仰に厚く、人間に対する思いやりに満ちていた」という。その後、兵役拒否問題、誤訳論争に遭遇し、翻訳家としての地位を確立していくが、それについては別の機会に触れる。

2、時代と課題

北御門は多くの点で小山勝清と対比的である。その途中にエンブリー夫妻も介在する。この三者をクロスさせることは三者の生きた時代性を分析するうえで有効である。それは維新150年を考えると一つの分野をなす。本誌が三者に注目する理由はそこにある。三者以外

にも加えるべき人物はいるであ

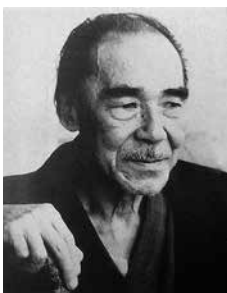
トルストイの翻訳家・体現者の側面に注目する時、北御門訳トルストイを通じてトルストイを知り、それを通

らう。しかし、ひとまずはこの三者に注目するにどめよう。

私たちは非力である。三者には独自に検討すべき価値がある。私たちはそれを深く進める能力をもたない。しかし、三者が呼吸した場所にいる。外部から三者を眺めるのではなく、生きていた土地で三者に接することができる。



翻訳中の北御門二郎



小山勝清



エンブリー夫妻

して北御門を理解する構造のものに在る。トルストイは世界的文豪・思想家で、その全貌を把握することは困難だが、北御門にアプローチするためには、彼を通じてトルストイを理解するしかない。彼とトルストイは別の人格だが、トルストイを抜きにして北御門を捉えることはできない。そこで、私たちはトルストイを読むであろう。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

地域探訪①

八代市坂本町藤本地区

荒瀬ダム跡下流1500メートル右岸にある藤本地区は、旧上松求麻村の中心地である。江戸時代の庄屋の居住地で、村社・藤本五社神社の所在地である。庄屋は八代支配時代の相良の家臣で相良の殿様が八代に向かうとき紋付袴で出迎えた



藤本地区の石垣と米蔵

とされる。相良の葺山騒動なばやまざうどうのとき、外間（スパイ）として活動している。人吉・球磨・坂本・八代の川舟の乗り手たちは五社神社を集会の場所にしていった。同地区の舟乗りは都城、日田の舟運開通の技術指導に派遣されるほどの技能者が揃っていた。また

同地には、米蔵が多数あった。それは球磨の米を八代に運ぶときの集積所として



藤本五社神社

利用された。同地は、藤本発電所があった場所でもある。荒瀬ダム上流4キロ右岸の鎌瀬地区には藤の花が咲き、その根元は藤本にある（藤の蔦が鎌瀬で伸びている）ので、藤本という地名があるとの伝承がある。それは鎌瀬側からみた伝承で無意味にみえるが、フジモトは淵の元に由来すると推測されるので、まったくの出鱈目の伝承であると切り捨てるべきではないだろう。（春秋）



藤本発電所跡